

河野樹一郎¹・牧野真人¹・岸本 剛¹: 報告 - 第21回日本植生史学会談話会Tatsuihiro Kawano¹, Masato Makino¹ and Goh Kishimoto¹: Report-21th Japanese Association of Historical Botany meeting

日 時: 2003年5月31日(14:00)~6月1日(14:00)

場 所: 宮崎県綾町

観察会: 照葉樹林の観察

話 題: 南九州の森林植生の分布パターン -

宮崎の現存植生を中心に -

河野耕三(宮崎農業高校)

第21回日本植生史学会談話会が上記の日程で開催された。テーマは「照葉樹林の植生観察会」で、談話会初日に野外観察会と1件の話題提供があり、続いて翌日も野外観察会が行われるという、談話会としては初めての観察会主体の構成となった。前日まで台風4号の影響を受け、一時は開催が危ぶまれたものの、参加者の日ごろの行いのせいか、幸運にも天候に恵まれ観察会は予定通り行われた。参加者は15名であった。

初日は、綾町の大森岳(1108.6m)を挟むように流れる2本の河川(綾北川、綾南川)のうち、綾南川上流に位置する川中キャンプ場付近において照葉樹林の観察会が行われた。現地では、河野耕三氏に案内をしていただいた。キャンプ場から林内に入ると、樹高が30mはあるかと思われるイチイガシの大木やツブラジイ、タブノキなどが林冠を形成する、階層構造の発達した林分が観察できた。高木層を形成する樹木にはフウランやナゴラン、ミヤマムギランといった着生植物も豊富で、また林内には全国的にも極めて分布が限られているハナガガシが生育するなど、種組成的な面においても南九州の照葉樹林の特徴がみられた。その他、木本植物ではバリバリノキ、カンザブロウノキ、タイミンタチバナ、ミズズバイ、バクチノキ、ヤマビワ、アデク、シイモチ、タニワタリノキ、ハドノキ、ツゲモチ、ミヤマトベラなどが、草本やシダ植物ではオオサンショウソウ、ハナミョウガ、オオイワヒトデ、スジヒトツバなど、どれも照葉樹林に特徴的な多くの植物が生育していた。河野氏によると、現在綾南川流域に残されている自然性の高い照葉樹林は、主に山腹から川沿いにかけての急傾斜地に多いという。こうした厳しい立地条件により人為的な影響が最小限に抑えられ、自然性の高い森林が残されたのであろう。また、斜面を登り、少し標高が上がると、イスノキやアカガシの大木が出現しはじめ、尾根部や崖地にはモミヤツガ、アカマツなどが混生した林分もみられるなど、標高や立地の違いによる植生の変化も見ることができた。観察会中は雨上がりだったことも手伝って、ヒルが足元から次々とよじ登ってきて、参加者全員がヒルを必死に

なって振り落としていた。だがそうした中でも、参加者たちは単に植生を見るだけでなく、林内に堆積した土壌や日ごろ見慣れない樹種の材を観察するなど、それぞれの専門分野に応じて観察会を楽しんでいた。

2日目は、綾北川流域に成立する照葉樹林を観察した。ここではまず午前中に車で移動しながら、綾北川沿いの照葉樹林の景観を観察した。モコモコと盛り上がった林冠が、成熟した照葉樹林であることを感じさせた。また、道路沿いの沢筋では宮崎県固有種であるヒュウガアジサイが可憐なピンク色の花を咲かせており、その他にも橙色の実をつけたヤナギイチゴなどを見ることができた。午後は大森岳の林道から林内に入り、綾北川の南側斜面に発達する林分内を歩いた。ここは独立行政法人森林総合研究所九州支所の綾リサーチサイトにあたる場所で、長期生態研究(LTER)を目的とした大面積プロットが設置されている。林内にはイスノキやウラジロガシ、アカガシ、タブノキなどの大木が所々にそびえ、その他にもコショウノキやトキワガキ、カゴノキ、ホソバタブ、イヌガシ、ヤマモガシ、シキミ、ミヤマシキミといった照葉樹林要素である多くの植物が混生した、発達した林分構造がみられた。

こうして2日間に渡って行われた野外観察会では、全国的にも極めて危機的な状況にさらされている自然性の高い発達した照葉樹林を観察でき、貴重な体験をすることができた。綾町の照葉樹林は、戦後の高度経済成長期の中で、一時は無用な雑木林として伐採の危機に直面したが、当時の綾町長であった故郷田氏の努力によって皆伐を免れ、現在では「綾の照葉樹林」としてその名を全国に知られるようになった。こ



図1 発達した照葉樹林(撮影: 牧野真人)。

¹ 〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 京都府立大学大学院農学研究科森林環境学研究室

のような成熟した照葉樹林は学術的にも、また地域の特徴を形成する文化的な面においてもたいへん貴重な自然といえる。また、今回実際に林内を歩いてみると、照葉樹林として一様にまとめられる植生の中にも、細かな地形やわずかな標高の違いによって様々な種組成を持った林分が形成されているのが観察できた。今後の植生史研究において、こうした局所的な立地環境に反映される種組成の相違について検討していくことの必要性を改めて感じた。

初日の観察会終了後、宿舎で夕食をすませたあと、河野氏による話題提供が行われた。主な内容は、これまでに河野氏が行ってきた植物社会学的な調査結果を基にした、綾町の照葉樹林を含めた宮崎県の森林植生の特徴、および宮崎県の二次林や社寺林、里山の植生に関する内容の2点であった。ではまず、宮崎県の森林植生について東アジアの植物区系としての観点から説明があり、その後県内における標高の違いや海岸線からの距離に伴う森林群落の分布パターンが示された。また、県内における森林植生の垂直分布構造を中国大陸（華東地区）や屋久島の森林植生と比較し、屋久島や宮崎県のような多雨気候下では水分条件に恵まれているため、植生分布の制限要因が温度を軸として考えられることなどが示された。では、宮崎県の現存植生図および潜在自然植生図、また社寺林等の写真を用いて、県内における二次林の分布や過去からの人間と森林との関わりについての説明がなされた。講演終了後の懇親会では、地元の焼酎や日本酒を味わいながら、観察会や講演の内容についての活発な議論が繰り広げられた。

今回の植生史学会談話会は初めて野外観察会主体で行われたが、通常の話題提供主体の談話会と比べると、実際の植生をより身近に感じながら植生史について議論することができた。野外に出るため天候に左右されやすい点は否めないが、今後もこうした形式の談話会が行われることを期待している。



図2 樹木の説明をする河野氏（撮影：高原 光）。



図3 大きな林冠を形成するイチイガシ（撮影：牧野真人）。



図4 タブノキの大木（撮影：牧野真人）。